平井達也詩集『東京暮らし』
現代社会の苦味とリアルな生活実感

佐相　憲一

詩集タイトルと裏カバーの収録作品タイトルを見ただけでも新鮮な関心を覚えたという声があった。好評の新刊詩集である。「球技」「おい　東京」「転居」「西武線」「水曜日の焼き鳥」「土曜日正午、蕎麦屋」「豚くさい祝日」「毒婦」「ドラッグ・アイドル」「新宿」「保存方法」「あなたは郷里でスープを」「休暇はおしまい」「出勤」「深夜便」「山羊」「潜水列島」「感染」「オフライン」「連休」「村を走る」「農村の晩秋」「お父さんは白い犬」「傘」「この坂道」「いまだ前線は近く」「だいだい色の海」「嘘」「遺失」「います、いますか」「私的因果論」「夏の裏面」「秋の裏面」「見えない」「夜に引っかかる」「旅暮らし」「パンツ」「髭が伸びた分だけ」。

現代の働き盛り世代の生活の匂いが親しみ深く伝わってくる。日本の現代詩に生活感のない詩が多くなっている昨今、もちろん生活感を大事に書く詩人たちはいる。多くは退職者の日常や母親の子育てなどである。他方、壮年層や青年層の現役の勤め人の悩み多い生活や葛藤、人間関係、そこから見る社会的な実感などがビンビン伝わってくる詩というのは、残念ながらあまり見られない。その意味でもこの詩集は待望の書であろう。

この親しみやすさには、個人の生活から出発しながら社会の深部を見つめる批評眼の重みがある。その現実認識は鋭くシニカルである。この社会システムへの違和感とも言えよう。だからこそ、表現手法としては軽いタッチの語りなのだ。こういう技術は、本当に文学を愛する実力派でないと、また読み手のことを誠実に考える人でないと、使いこなせない。いとも簡単にやっているように見せるこの芸当が小気味よい。

詩集は序詩「球技」で始まる。東京暮らしの人が一年ぶりに郷里に帰る。〈自動車とプロ野球の街〉、車の豊田市もある愛知県の名古屋辺りであろう。企業社会と日本資本主義の象徴のような中京工業地帯である。彼はその郷里を次のように描写する。

〈父母が暮らす家の裏の広い通りには／なぜか斎場がいくつも並び／葬式通り　と呼ばれるようになった／葬式通り界隈には／私と同じ年頃の男たちが何人も／親元に暮らしていて／不規則な時刻に非常勤の仕事に出てゆく／この秋／かつては日本で最も売れていた／国民車の輸出停止が検討され始めた〉。不況と格差社会と非人間的雇用によるさびれ方だ。それを理屈ではなく、生きている人間の実感から書いている。〈父は工業出で／一工員で終わった〉。作者は東京暮らしと郷里の父母と社会を考えながら〈葬式通りを一時間かけて散歩してきた／スーパーマーケットでは／すき焼き用に牛肉が売られていた／老いた親と住む／非常勤雇用の息子たちも／すき焼きをつつくのだろうか／明ける年の希望を語るのだろうか〉。そうだよなと共感する向きも多いことだろう。そのような悲惨な現実を見つめつつも、プロ野球の街で育った詩人は、サッカーなどボールで遊ぶこどもたちに希望を象徴させる。グローバリズムの弊害著しい不平等世界の他国の人々にも連帯する視点で。〈インドでもブラジルでも／ジンバブエでもトンガでも／明ける年の希望は語られるのだろう／絶望工場があちこちに建てられようと／そこにはボールがあり球技がある／ボールを追う子どもらの輝く目がある〉。

Ⅰ部は「東京暮らし」。学生時代に郷里から出てきて二十年以上を首都で暮らしてきた人の生きた実感で、人間模様や社会の断面が語られる。〈おい　東京／おまえのふところに飛び込めば／きっと夢がつかめると／暮らし始めて二十年が経った／おまえの内臓はでかすぎて／深すぎて／いまだにその中で／浮いたり沈んだりしているだけだよ〉（「おい　東京」）。ほろ苦い。作者個人のことを書きながらも、詩の言葉は作者個人をこえて、読み手は自らの代弁者のような共感を覚えるのである。

続く諸作品で恋や仕事や時代社会の中での疎外感など、思うようにいかない現実とのたかかいが親しみやすいタッチで続く。勤め帰りにすなぎもなど焼き鳥を齧りながら、そして行きつけのスナックのママとの会話に心癒やされながら、ブツブツつぶやく「水曜日の焼き鳥」。〈かき揚げ蕎麦のつゆに／きのうまでの憂鬱を浸して／五十年でトッピングした生卵に箸を差す。／ターミナル駅構内の蕎麦屋に／忘却への意思がこもってゆく週末〉の「土曜日正午、蕎麦屋」。「豚くさい祝日」に好むというとんこつ醤油ラーメンを〈濃いめの味にしてもらうのは／反応してこみ上がってくる吐き気／くらいでしか確かめられないものがあるから〉というくだりなどは妙にリアルでうなってしまう。コミカルな詩篇の中に、人生そのものに絶望してしまいそうになるのをこらえてたくましく生きる庶民の生活感が抜群のリアリティで描かれているのだ。

「毒婦」は地味だが、いい詩だ。〈テンさん〉という五十歳近い男性のことが描かれている。〈そろそろ誰かと一緒に暮らしていきたいと／町の結婚相談所に行ってみたという／でも俺エリートじゃないし／見栄えも冴えないし　と／テンさんは焼酎を飲みながら少し笑う〉。聞けば、女性に騙された経験があるという。〈でもテンさんは女を信じたいと思っている／悪い女ばかりではない　と／口には出さないけれど／カラオケで入れる歌でわかる〉。それでも〈ときには女に感謝さえする〉というテンさんへの作者の友情のようなものが読み手に温かく伝わってくる。〈それを愚かだというのは正しくない〉という作者の言葉。ここに読者は、冷たい社会の隅っこで騙されても夢を捨てずに人を信じて暮らしている人の、本当は叫びたいだろうこころを代弁する詩人の言葉に、熱い共感を覚えるのだ。詩はテンさんの素朴な様子を描写して終わっている。今日の日本社会の孤独の様相の典型的情景であるとも言えよう。一般の人に伝わる詩だ。

ほかの作品も、作者や周囲の人々の大都会での生活が描かれていて、映画を観ているような鮮明さとやるせなさがある。口語体の臨場感を効果的に使った手法のⅠ部である。

Ⅱ部は「列島」。ここから詩集は、口語に加えて、硬質な書き言葉と巧みな暗喩を駆使しながら、日本社会のさまざまな断面に入っていって状況を提示する。その問題意識と批評精神が光る。Ⅰ部の気さくで生活感たっぷりな作者が、Ⅱ部のドライな切り取りと暗示も書くことに、確かなものがある。

「深夜便」では不安な時代における伝達労働と夢が描かれる。

「潜水列島」の緊急事態は今度の震災にもつながる視点で描かれる。産業、工業の危機。〈基準や関係がゆがむ／何かが低くなっているのだ〉という二行がグサリと突き刺さる。

伝染病パニックの当事者の状況を描いた「感染」、高度に発達した情報化社会の盲点のような恐怖をリアルに描いた「オフライン」、〈日ごとにシャツが汚れていく〉謎めいた〈渋滞〉状況の下での「連休」など。

そして、都市や村の閉塞感を描いた詩が続く。Ⅱ部ラストの「いまだ前線は近く」の最後二行は日本の現状だ。〈たっぷりと湿気をたたえた空が／重たい色で覆い続けている〉。

Ⅲ部は「こころ」。作者本人の日常に戻り、しみじみとした内省も見せる。苦悩を掘り下げ、矛盾という文学の根本的なところに詩想が届く。苦悩しながらも恋愛などに元気を得てまた前へとすすむ心理は、今日の少なくない人々の代弁とも言えよう。

〈だいだい色の恥の海に／きのうも沈んだ。／なかまたちの言葉が／知恵の輪みたいにややこしかった。〉（「だいだい色の海」）。〈嘘はみな泣いている／真でありたかったけれど／強くはないから／生きてゆくためには／嘘であり続けなければならなかった／そして嘘のまま死んでゆく〉という「嘘」もリアルだ。物事の本質を描く中に自己批評もあって、奥が深い。

詩集に恋愛の詩がかなり入っているというのも現代詩の世界では稀であり、この詩集の幅広さであろう。

「見えない」「夜に引っかかる」の二篇には〈まゆちゃん〉への語りかけが優しく綴られているが、詩としての独自のリズムと、言葉が持つふくらみに深い文学的センスがうかがえる。〈メガネを外したぼくも／メガネをかけたまゆちゃんも／／うわぁ　見えない／／見えないけれど／二人で笑っている〉（「見えない」）。〈まゆちゃんはいろいろなものを／ていねいに磨いて　好きな色に塗って／でもいつもすぐにそれは／割れてしまうのだ／そんなことばかりなのだ／だから笑うしかないんだな〉。

「パンツ」のユーモラスな日常に、世界や社会への〈抗議〉と不安がさりげなく織り交ぜられている。

詩集最後の「髭が伸びた分だけ」のラストを引用する。

〈コンビニで弁当を買う／きょう初めてなんの打算もなく／選んだ気がするチキンソテー弁当に／どんな救済を求めてしまっているのか／／一日の終わりに鏡を見る／髭が伸びた分だけ／希望を控えめにしていたかもしれない〉

これは第一詩集だが、実は作者は小説の方で二〇〇三年に自治労東京文芸賞を受賞している。描写がリアルなのはそのようにコツコツと表現力を磨いてきたからだ。早稲田では文学を専攻したらしいが、異郷の大都会で生きるために公務員の仕事を選択し、働きながら人生経験を重ねた。社会に対する目もより鋭くなっただろう。そのような中で書いてきたからこそ、平井さんの詩には一般社会で苦闘している庶民の生活感に合った生きた言葉が響いているのだ。二十一世紀の社会の現実の中で光る、現代詩の〝逸材出現〟である。強くおすすめしたい。